

9.4GHz帯と9.7GHz帯の使い分けの 基本的な方向

気象レーダー作業班事務局

9.4GHz帯の検討状況

○ 現状（9.4GHz帯）

- ✓ 9.4GHz帯の無線標定は、国内分配上、「船舶レーダー」と「航空機搭載レーダー」に対して劣位である。
- ✓ 約100局の全てが実験試験局となっている。

○ 共用システムからの要求条件

① 船舶レーダー



気象レーダーに対し、「送信パルス毎にPRFを変動する機能」を具備することが要求されているが、現時点での対応は困難であり、引続き調整が必要。

② 航空機搭載レーダー



「周波数離調」、「サイド-サイドのみ」を条件とした場合に共用の可能性がある。

③ 衛星放送受信設備



屋外での干渉実験の実施を求められているが、船舶レーダーとの調整が未了であるため、今後の状況を踏まえて速やかに対応する。

○ まとめ

船舶レーダーとの調整が未了であるため、現時点で諸元等の具体的な提示は困難。

9.7GHz帯の「現状」と「検討の方向性」

【現状】

- 9.7GHz帯の無線標定は、国内分配上、一次業務である。
- XRAIN等の高精度観測が可能な気象レーダーが約50局が配置されている。
- 実験試験局は約5局である。

【検討の方向性】

- 9.4GHz帯の検討状況を考慮すると、今後、9.7GHz帯の利用可能性を先に検討することが有用である。
- 9.7GHz帯の共用システムには「沿岸監視レーダー」と「波高レーダー」があり、それらとの共用可能な条件を整理する必要がある。
- XRAIN等の公的機関による高精度観測が可能な気象レーダーは、国民の安全・安心に不可欠な機器であり、その重要性を踏まえて他の用途の気象レーダーとの位置付けを適切に整理する必要がある。

9.7GHz帯等の「検討の方向性」と「まとめ」

- 日本全国に設置可能な気象レーダーには限りがあるため、現状を十分に踏まえつつ、中長期的な観点から全国的なチャネルプランの作成が必要であると考えられる。
- 特定の地域における今後のニーズにもよるが、9.7GHz帯の追加的利用が極めて困難であると見込まれる場合を想定し、9.7GHz帯以外の利用のあり方も検討する。
- 衛星放送受信設備(BS、CS)とは、諸元が明確になった段階で速やかに実験を行い、周波数共用が可能な運用条件や設置場所の条件を確認する。

【まとめ】

- 今後、気象レーダーが利用する周波数帯としては、まず9.7GHz帯において検討する。その際、周波数の利用の稠密性や地域的なバランス等を十分に考慮しつつ、他の周波数の利用可能性を含めて中長期的な観点からの利用方針をとりまとめ、その上で円滑かつ効率性の高い周波数の利用のあり方の確立を目指す。